

2022年10月2日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

エゼキエル書 18 : 30～32

ローマの信徒への手紙 8 : 38～39

「ただ一つの慰め」

(ハイデルベルク信仰問答 序 問1～2) ※問答は「日々の祈り」をご覧ください。

<教理を知ること>

今日から、『ハイデルベルク信仰問答』に従って、毎週聖書の御言葉を聞き、信仰の教理を共に味わっていきたいと思います。

「信仰の教理」とは、「信仰の教えの体系、筋道」のことです。そう言うと、何だか小難しい勉強が始まるように感じられる方もあるかも知れません。

でも、教理というのは、単なる知識や、学問ではなくて、聖書に語られている御言葉の恵みを、わたしたちがより豊かに、よりしっかりと受け取るためにあるものです。

大切なのは、わたしたちは礼拝でこの信仰問答についての勉強会をするのではなく、説教、聖書の神さまの御言葉を、この信仰問答を使って、より深く聞いていく、ということです。

信仰問答は、当然のことながら聖書の御言葉を根拠に造られたものです。

『ハイデルベルク信仰問答』は、わたしたちの教会の伝統の元となる、改革派の教会で、宗教改革の時代に、その激しい戦いの最中で生まれました。これは、聖書はこのような福音を語っているのだ、という、当時のプロテスタント教会の人々の、命がけの信仰告白だったとも言えます。

そのようにして言い表された信仰告白の言葉は、今の時代になっても、生き活きとわたしたちの教会に受け継がれているのです。

そしてまた、信仰問答は、聖書全体をより深く正しく知るために、とても便利なものです。

ある人は、聖書を海に例えてこう言いました。海の本物の豊かさ・素晴らしさは、実際に海とたわむれ、海と共に生活してみなければ分からない。でも、あの計り知れない海全体を、わたしたちはどうして理解することが出来るだろうか。そこで、羅針盤のようなガイドブックが必要になる。それが、聖書のエッセンスを簡単明瞭に教えてくれる「信仰問答」のような書物なのだ、と。

わたしたちも、この『ハイデルベルク信仰問答』という羅針盤、ガイドブックを片手に、これから恵み豊かな神さまの御言葉の大海原に漕ぎ出していきたいと思うのです。

<第一番目の問い>

さて、今日は問1を中心に見ていきます。

このような信仰問答の一番目の問いというのは、書物全体の方向性と、この信仰問答が導

いていこうとするルートを決定づけるのに、とても重要な問いになります。

あの豊かな聖書の大海原の中で、どのようにわたしたちという舟を導くか。そこには、必ず通らなければならない要所がいくつかあるのですが、それをどのように辿っていくかというルートは、実は数えきれないほど描くことができます。

ですから、教会にはこれまで何百もの信仰問答が生み出されてきたのです。

さて、『ハイデルベルク信仰問答』もまた、第一問目で、書物全体がどのようなテーマでわたしたちを導こうとしているかを指し示しています。

まず、問1～2を読んでみます。（「日々の祈り」か、お手持ちのテキストをご覧ください。）

ハイデルベルクがこれから語ろうとするすべての中心に据えたのは、「慰め」という言葉です。「慰め」は、教理の言葉ではありません。むしろ、イエスさまを信じる者が受け取っているものを表す、喜びと感謝に満ちた信仰の言葉です。

ハイデルベルク信仰問答は、書物全体を通して、この「慰め」へとわたしたちを導き、この「慰め」に生かそうとしています。

そして問2は、その「慰め」にわたしたちが喜びに満ちて生きて死ぬために知る必要のあることとして、第一、第二、第三と、三つのことを挙げています。これが『ハイデルベルク信仰問答』の書物全体の構造になっています。これから信仰問答は、第一部 人間の悲惨さについて、第二部 人間の救いについて、第三部 感謝について、と展開していくのです。

こうして、ハイデルベルクで教えられていくことは、ただの知識ではありません。

わたしたちが聖書の御言葉を通して、罪から救われ、ただ一つの慰めを得て、感謝と喜びの生活に生きるようにと、信仰者としての歩みや生活そのものを導こうとしているのです。

<慰め>

さて初めに、こう問いかけがありました。「生きるにも死ぬにも、あなたのただ一つの慰めは何ですか。」あなたのただ一つの慰め。

わたしたちは、生きていくにあたって、いくつか慰めになるようなものを持っているかも知れません。愛する人や友人との時間が慰め。子どもや孫の成長が心の慰め。疲れた時の音楽が慰め。大事なペットがかけがえのない慰め。普段、「慰め」というと、心をなごませる、楽しませるとか、悲しみや苦しみにある心を紛らわせるとか、そのような意味で使われます。

しかし、ここで問われているのは、心とか、気持ちとか、感情の問題の「慰め」ではありません。「生きるにも死ぬにも、あなたのただ一つの慰めは何か」と問うています。生きるにも「死ぬにも」です。この問いには、どのような背景があるのでしょうか。

この書物が書かれた当時は、宗教改革による混乱がまだまだ続いている時代でした。信仰のために迫害を受け、殺されるかも知れない。明日、死ぬかも知れないのです。しかし、そのような時にも「慰め」として持っていられるものがあるか、ということです。

特にここでは、「あなたの、慰めは何ですか」と問われています。あなたがその手に持つ

ている慰め。自分のものとして握りしめている慰めです。それは、生きるときも、そして死ぬときも、その手にありますか？と。

そうであるならば、この「慰め」という言葉は、わたしたちが普段使っているよりも、もっと深い意味を持っています。これは、わたしたちの人生、命、実存がかかった、そんな慰めは何か、と問いかけているのです。

新約聖書で多くの手紙を残したパウロという人がいます。この人は「慰め」という言葉をよく使いました。そして、これは聖書箇所によっては、「励まし」とも訳されています。

この聖書の「慰め」の意味は、英語の「慰め」という単語の成り立ちを知ると、よく分かります。慰めは、英語では **comfort** と言います。これはラテン語の **con** と **fortis** という言葉から出来ているそうです。**con** は「強める」という意味。**fortis** は「強い」あるいは「難攻不落」。また「砦」という意味もあります。

つまり、「慰め」と訳されている元の言葉は、強さを強める、とか、非常に強い、とか、強い砦、という意味があるのです。

つまり、あなたが生きるにも死ぬにも、あなたを非常に強めるもの、あなたを難攻不落にして、何ものもあなたを落とすことが出来なくするもの。あなたを固く立たせ、守り抜く砦。それは、何ですか、と問うているのです。

<キリストのもの>

これに、ハイデルベルク信仰問答は、はっきりと答えを示しています。

「生きるにも死ぬにも、あなたのただ一つの慰めは何ですか。」

答「わたしがわたし自身のものではなく、体も魂も、生きるにも死ぬにも、わたしの真実な救い主 イエス・キリストのものであることです。」

わたしがわたし自身のものではないということ。わたしはイエス・キリストのものであるということ。これが、ただ一つの慰めだ。そう言うのです。

わたしがこの手に持っている、わたしが握りしめている、わたしの慰めとは、キリストがわたしを持っているということであり、キリストがわたしを握って離さないことである、というのです。

それはまさに、今日読まれたローマの信徒への手紙 8:38~39 に語られていたことです。

「わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。」

これは、心の中の感情的な慰めではありません。この慰めは、毎日、この世で生活をしていくわたしを強めるものであり、人生の歩みを支えるものであり、命を守るものであり、嵐や試練の中で砦となるもの、わたし自身の存在そのものが立つ土台となるものです。

ですからハイデルベルクも、「体も魂も、生きるにも死ぬにも」と言っています。

わたしは、この体もこの魂も、存在の全てが余すところなく、生きるにも死ぬにも、キリストのものなのです。そして、何ものも、死も、命も、見えないものも、見えるものも、今あるものも、これから来るものも、イエス・キリストから、神さまの愛から、わたしを引き離すことは出来ないのです。

つまりこれは、変な言い方かも知れませんが、わたしが持っているこの慰めは、もはやわたしが自分で手放すことさえ出来ない、ということです。イエスさまが、わたしをご自分のものとされたなら、もはやわたしはわたしのものではない。そして、何ものもこの方からわたしたちを引き離すことは出来ない。この方がわたしたちをご自分のものとして、永遠に離さない、ということなのです。それが、わたしの、ただ一つの慰めです。

<三位一体の神>

そして、その答えの続きには、どのようにわたしたちがイエスさまのものとされ、その救いに生きることが出来るようになるのか、ということが語られています。

まず最初に、「この方はご自分の貴い血をもって わたしのすべての罪を完全に償い、悪魔のあらゆる力からわたしを解放してくださいました」とあります。

イエスさまは、ご自分の尊い血をもって、わたしのすべての罪を完全に償って下さいました。イエスさまは、ご自分の十字架の死によって、命を投げ打って、わたしたちの罪と、その裁きをすべて代わりに担って下さったのです。ここまでして下さいによって、わたしたちは罪の奴隷から、悪魔のあらゆる力から解放されました。そして、イエスさまのものとされたのです。

さらに、答えの続きを見てみましょう。次の段落は、「天にいますわたしの父のみ旨でなければ 髪の毛一本も落ちることができないほどに、わたしを守ってくださいます。実に万事がわたしの救いのために働くのです。」とあります。

さらに、その次の段落は、「そうしてまた、ご自身の聖霊によりわたしに永遠の命を保証し、今から後この方のために生きることが心から喜び またそれにふさわしくなるように、整えてもくださるのです。」と続きます。

ここに、わたしがキリストのものとして、慰めの内に生き、また死ぬために、神の御子イエスさまと、天の父なる神さまと、聖霊なる神さま、三位一体の神さまが、働いて下さることが語られているのです。

御子イエスさまは、天におられる父なる神さまの御心を成し遂げて、わたしたちを救い、ご自分のものとして下さいます。また、わたしたちが、このイエスさまの救いを確信し、救われた喜びをもって感謝の生活に生きようになることは、御子イエスさまが送って下さる聖霊によって、わたしたち一人一人の上に実現するのです。

ハイデルベルク信仰問答は、このようにして、神の御子であるイエス・キリストを中心にしつつ、父、子、聖霊なる三位一体の神さまを信じ、告白しているのです。

また、この問1の答えは、この三位一体の神さまが、初めから最後まで、過去、現在、未来を通して、わたしたちの救いのために働いて下さることを示しています。

つまり、御子イエスさまがわたしの罪を償い、解放して下さった、過去に既に成し遂げられた救いのこと。そして、その救いにあずかるわたしたちが髪の毛一本も落ちることが出来ない程に、今の時を守られて歩んで行く現在のこと。そして、永遠の命の約束が保証され、ふさわしく整えられていく未来のこと。

初めから最後まで。生まれる前から、生きている今も、そして死んだ後に終わりの日に至るまで。わたしたちは、父、子、聖霊なる神さまの御手の中で、お働きの中で、真実な救い主、イエス・キリストのものとされて、この慰めの中で喜びに満ちて生き、また死ぬことが出来るのです。

<真実な救い主>

さて最後に、問1の答えの中で、イエス・キリストのことを「わたしの真実な救い主」と呼んでいました。

「真実な」とは、誠実であるとか、忠実である、とも言うことが出来ます。わたしをご自分のものとして下さる方は、誠実な、忠実な、救い主である。

ハイデルベルク信仰問答は、わたしたちが誠実でなければいけないとか、忠実でなければいけない、ということは一切語っていません。そうしようと願っても、罪に捕らえられているわたしたちには、それが出来ないからです。わたしたちが、そのようなどうしようもない、悲惨な罪の中にあることは、次の第一部で語られていきます。

しかし、それはつまり、わたしがイエスさまのものである、ということは、わたしの何にもよらないということ。わたしがイエスさまのものである、ということは、すべてイエスさまの誠実さ、イエスさまの忠実さ、このイエスさまが真実な救い主である、ということに全部かかっている、ということなのです。わたしたち人間がどんなに不誠実で、不忠実で、裏切ったり、背いたりするものであっても、イエスさまはその誠実を、忠実を、わたしたちに対して貫き通して下さいます。だからこそ、イエスさまは十字架の死によるわたしたちの罪の贖いを成し遂げて下さったのです。これが、イエスさまの真実です。

ただ、このイエスさまが真実な救い主である、というところにのみ、わたしたちの救いの根拠があるのです。

「生きるにも死ぬにも、あなたのただ一つの慰めは何ですか。」

わたしのただ一つの慰めは、わたしがわたし自身のもではなく、体も魂も、生きるにも死ぬにも、わたしの真実な救い主イエス・キリストのものであることです。

わたしがこの手に持っている、わたしのただ一つの慰めは、わたし自身が、この誠実で、忠実で、真実な救い主である、イエスさまの慰めの御手の中にある、ということなのです。

【お祈り】 天の父なる神さま

わたしたちに、ただ一つの慰めを与えて下さり感謝をいたします。わたしたちは、イエスさまのものである、と言われていました。これは生きるにも死ぬにも永遠に失われることのない慰めです。この慰めを、これからより深く、より豊かに味わい知り、この慰めをこそ、喜びとし、苦しめる時の砦とし、命の拠り所としていくことが出来ますように。

わたしたちの真実な救い主、イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン